東方融合伝～変態が幻想入り～

イルムガルト・カザハラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方融合伝〜変態が幻想入り〜

【Nコード】

N6482S

【作者名】

イルムガルト・カザハラ

【あらすじ】

東方融合伝。それは一人の変態と、数多の美少女たちの物語。

「さあ仔猫ちゃん…脱がすぜ!!」

早い話がハーレムでエロくてキャラクターたちと合体してく物語。

彼は幻想郷でどう生きていくのか？

そんなことはわからんけど。

プロローグ「見よ東方は赤く萌えている」

ここは2010年の東京都。

そんな大都会の中、1人の青年が小さなアパートに帰ってきた。

グラハム・松田。

それが青年の名前だ。

米国人の母親。

日本人の父親。

その2人のあいだに生まれた男だ。

ちなみに変態。

靴を脱いで家にかかる。

「ただいま」

「おかえりなさい」

帰ってきて、自分を待っていたのは鳥女。

夜雀とか言っていた。

1ヶ月程前に、家の周りを飛んでいたの、モデルガン（改造済み）で撃ち落としし、撃ち落としした後気絶しているのに気付いて持って帰った。

意外と可愛かったの、飼うことにすると、本格的に人間じゃ無いことを理解できた。

飛んでたし、羽あるし。

彼、グラハム・松田はいつか使うだろうと買っておいたSM用の首輪をそのでかくて人型の雀に着けた。

そして、1ヶ月に至る。

「ご飯作っておきましたよ」

なぜか、首に輪を着けた少女はなついていた。

起きた直後に泣きわめきそうだったので、あのままだったら悪の組織に捕まって売り飛ばされると話したのが良かったのだろうか？
わからないが、飼っている鳥になつかれるのは悪いことじゃ無い。

ちなみに名前はミスティア・ローレライと言うそうだ。

「どつぞ」

相変わらず、家にあるだけの食材等で良く料理を付けれる。
屋台でも開きたくなる。

女将でもできるだろう。

女将スティア。

言って鼻で笑った。

「美味しい？」

作ってくれた料理を口一杯に頬張って頷いた。

「良かったです」

嬉しそうに笑った。
いつも元気だな〜と思う。

「はあ」

だが、今のように何かを思ってたため息を吐いている時もある。
なには知らないが、起きた時に言っていた幻想郷とやらと関係はあるのだろうか？

「ようやく見つけたわよ？」

部屋の空間が割けてスキマが開く、美女が1人現れた。

その美女はミスティアの首輪を見て驚くと、次はグラハム・松田を睨んだ。

そして、手から発光する何かを飛ばして鎖の刺さっている壁を破壊。
隣の部屋な誰も住んでいなくて良かったと安心。

「帰るわよ」

美女はミスティアの手を引いて、スキマの中へと入る。

グラハム・松田はミスティアの首輪の鎖を握り、スキマの中にダイブ。

ちゃっかりいつものお出掛け用カバンも持っている。

「なっ！着いてくるなんて良い度胸ね…」

美女が、ミスティアの首輪についた鎖を破壊した。

目玉だらけのスキマの中で、スキマが開いた。

「恐怖しながら死になさい…」

落ちていく感覚がわかる。

掴んでいる鎖が共に落ちてくる。

「俺の女将スティア計画があー!!」

グラハム・松田は叫びながら落ちていく。

ふと、景色が変わった。

どこまでも闇が広がる夜。

強く背中を打ち付け、痛みにも耐えながらも起き上がる。

「痛いぜマム」

辺りを見ると、木だらけだ。

なんだここ？と最近不思議ばかり起こるのを感じる。

「あなたは食べてもいい人類？」

その言葉と共に、幼女が現れた。

かなり可愛いと理解して、手にある鎖を見る。

「さすがに不味いか？」

「いただきます」

幼女が飛行してくる。

彼は立って、両手を広げる。

「カモン幼女！このグラハム・松田…イエスロリータイエスタッチ、
イエスBBAノーババアの精神で相手だ」

グラハム・松田。

変態の戦いが幕を開く。

プロローグ「見よ東方は赤く萌えている」(後書き)

初めまして、イルムガルト・カザハラです(^ 0 | 0 ^)
信愛をこめてイルムと呼んでください(^ ^ ^)

まだプロローグでなんとも言えぬ状態ですが、これからネタやらE
ロやら増やします(^ ^)

よろしく願います(^ ^) d

第一話「ロリだ！巨乳だあ！！結婚してくれ」

彼グラハム・松田は目の前から迫る少女に、両手を開いた。少女が、口を大きく広げて迫る。

「しゃぶるか！？良いだろう！！」

ズボンのベルトを外すグラハム・松田。

そして、ズボンに手をかけた瞬間。

目の前に迫っていた少女の体が横に吹き飛んだ。

「っマイフェイバリット幼女が！」

最後に高校を出た時に、英語の成績2の彼が叫ぶ。

幼女は謎の弾に吹き飛ばされた。

弾の放たれた方向を見ると、そちらには一人の少女が立っていた。

「ルーミア！その人は外来人だからダメ！！」

緑髪をした少女。

その少女はボーイッシュな姿をしていた。

頭に触角がついている。

その少女は走って、金髪の少女ルーミアを追う。

吹き飛んだ少女を立たせると、少女は小走りでグラハム・松田の前に立つ。

「すみませんでしたあ！！」

頭を下げる緑髪の虫少女。

「まあ、可愛いから許すか」

「は？」

グラハム・松田は落ち込みながらも頷く。
彼は座り込む。

「少女よ、ここはどこだ？」

少女が、驚いている。

「今…:…なんと？」

「少女よ、ここはどこだ？」

同じく啞然としているルーミア。
まあ、自分も東京にいて『ここはどこ？』と同じくらいの人間に言われれば啞然とする。

「い…」

「い？」

少女の言葉を聞き返す。

「いやったああああ…！」

叫ぶ少女。

夜の森に少女の声が響く。

驚くグラハム・松田。

「ありがとうございます！どこら辺が女の子に見えました？見えませんでした？」

興奮しているのか、楽しそうに言っている。

顔か？髪か？服か？体のどこかか？

少女、リグルは嬉々とした。

「匂い」

「は？」

「俺の特技だ：大体男と女は香水をつけてなきゃ匂いで区別が、ぶべらっ！！」

吹き飛ばす。

腹部への正拳突き。

宙を飛んだ後に地に落ちる。

地面を転がって、その後木に激突した。

そのまま、身体中の力が抜け、グラハム・松田の力が抜けた。

場所は変わって、マヨヒガ。

八雲紫の住居にミスティア・ローレライは居た。

スキマから返された直後、ここに来ていた。

「悪かったわね…寝惚けてスキマを開いちゃってね」

なるほどと、理解できた。

彼女が寝惚けて開いたスキマに入ってしまう事件は、良く聞く。

「なにか、されなかつた？」

思い出す。

まず飛んでいたらスキマにインしたお！

その後、あそこの上空に飛んでいたら、何かに撃ち落とされ気絶。

起きたらグラハム・松田に助けられていて、いつのまにかフリフリの可愛い服に着替えさせてくれていた。

そして、誰にも拐われないようにと部屋に固定してくれて、晩御飯や寝るところまで用意。

「感謝はしても、恨む気は無いです」

そう言っと、紫が驚いたような顔をする。

「鎖なんてつけられたの?」

「はい」

そこで、紫は悟った。

可哀想に、こつこつ風調教されたのね。

そう感じた。

「貴女は…料理が得意なのね?」

八雲紫がそんなことを言うなんて珍しかった。

不思議に思いながらもミステリアは頷く。

でも、幻想郷のどこかに落ちたらしいグラハム・松田のことも気になる。

「じゃあ、私の友人の元で…住み込みで働かない?」

「えっ?」

その言葉で、思考を遮られた。

紫は嬉しそうに微笑んでいる。

「給料だって弾んでくれると思うわよ?」

「は、はい…」

了承した。

お金を貯めて、彼を探しに行く。

探し終えたら、今度は自分が彼にご飯を作ってあげよう。

「鎖と首輪も必要かな？」

少し悩みながらも、彼女はそうしよつと頷いた。

彼。 Graham・松田は眠っていた。

「うう… 凄い、バキュームだ… うう… はあっ!？」

突如。目を覚ました。

上体を起こして、見回す。

しっかりとした家だ。

「どこだ？」

先程まで至福の夢を見ていたはずだと、頭をかしげる。

一昔前の、純和風の家だ。

障子が開いて、女性が一人入ってきた。

「おお、起きたか」

グラハム・松田に衝撃が走った。

信じられなかった。

牛乳うしぎち！それは正に彼が望む巨乳の完成形の一つ！

だが、ただの牛乳では無い。

あの大きさでありながら、張りがある。

重力を無視し、反重力を持っているのかと疑うほどの完成型。

ただ一つ、確認したかった。

どうやって確認する？さあ、選ぶしかない。

「バカ野郎…男なら、正々堂々真っ向勝負しかねえだろ！」

そう言って、立ち上がり走り出した。

「っ！？」

相手は驚いている。

しかし、彼は容赦無く。

その胸を鷲掴みにした。

そして胸を上げて寄せると頭を、その乳房に埋めた。

「ばっ…かな…弾力もある、だと！？」

その時、松田に電流走る！

彼にとっては、ありえなかった。
どんな場所に行っても決して出会えなかった乳。

彼は決しておつきいおっぱいが好きな訳ではない。
ただ、この乳は好きだ。

一般人の我々にはわからない変態ニズムがあるのだろう。

「ヒヤッハー！乳だあ！！！」

なんの躊躇もなく、女性の背中に手を回して強く抱く。
弾力のある乳がさらに顔に押し付けられていく。

「ふあまふあん！！！」

「貴様あああ！！！」

頭部に鈍痛が走った。

グラハム・松田。

彼が最後に見たのはかの女性の額。

それから、彼は二度目の気絶をむかえた。

第一話「ロリだ！巨乳だあ！！結婚してくれ」（後書き）

あとがき

さすが変態汚い。

はい。今回も変態度MAXでしたね（^^）d

このままヤツちまおうかと思いましたが自重しました。

あんたは偉い！

では、次回もよろしく！

第二話「男なら黙って特攻あるのみ」

グラハム・松田はふと、目を覚ました。
ついさつき見た天井が視界一杯に広がる。

「なんかあったな…そう気持ちの良いなにかが」

「もう一度頭突きが必要か？」

横から声が聞こえた。

そこには女性。

その女性を見て、ようやく全てを思い出した。

「最高の乳だったぜ」

寝ている額に頭突きをくらった。

後ろに吹き飛ばないことによって、衝撃をすべて額に喰らった。

「ひぎいー!!」

妙な叫びを上げて転げまわる。

女性は軽蔑するような目で見ていた。

止まるグラハム・松田。

「やめろよ、興奮するだろ？」

「っ…はあ〜」

深くため息をつく女性。

そして、彼女は呆れたような顔でグラハム・松田を見て。

「ついてこい…少し事情を説明する」

そう言った。

女性の後を着いていくと、居間らしき場所に着いた。

そこで机を挟んでお互い座る。

女性は咳払いをした。

「まず、私は上白沢慧音だ…慧音で良い」

一礼をする。

いきなり乳を揉んできた者にここまで親切な者は他に居ないだろう。

「こりゃご丁寧にグラハム・松田です…グラハムと呼んでください」

グラハムも一礼した。

意外と礼儀がなっているの、少し驚きながらも冷静に対応する慧音。

「グラハム…君はここに来た経由を憶えているか？」

その問いに頷く。

「美人の姐さんに」

「わかった結構だ…あのスキマめ」

「ん？」

「いや、なんでもない」

そう言つて、女性は頷いた。

なにがなんでもないのであるのか？ グラムにはさっぱりだった。その時、どこからか声が聞こえた。

「けーねー！」

慧音を呼ぶ声。

その声は、どんどん近づいてきた。

「慧音！」

慧音の背後にある襖が開かれて、少女が現れた。

白髪を持つ可愛い少女だ。

「なんだ妹紅？」

少女の名は妹紅と言うらしい、グラムの目が、光った。慧音と話している彼女を見る。

会話を中断して、慧音が妹紅を前に立たせた。

「藤原妹紅だ、可愛いだろ？」

「ちよつ慧音！」

恥ずかしそうにしている妹紅。

ふと、グラハムが妹紅の胸に手をあてた。

沈黙。

「なるほど、可愛らしいな」

直後、慧音が妹紅を下がらせた。

グラハムの頭を掴む。

「つなにをしているか…変態があ！」

鈍く重い音が響く。

グラハムは悲鳴も上げずに倒れ。

転がり回る。

「死ぬ！死ぬう！！」

ひーひー言いながらころがり回る。

慧音は肩で息をして、妹紅は顔を真っ赤にして口をパクパクしている。

「ぐおお～なぜだあ！！」

「自分の胸に手を当てて考えてみる！」

なんとか立ち上がるグラハム。

そして、自分の胸に手を当てる。

「ん」

少し考える素振りを見せた後、慧音の胸に手をあてた。

「超きもちい（某水泳選手風）」

「な、なんなんだお前はあ！！」

ヘッドバットを決める慧音。
再びのたうち回るグラハム。

「し、ぬう！！」

「本当になんなんだよお前はあ！！！」

もはや、慧音が涙目だ。

気の毒に変態に、情けをかけた結果がこれだ。

「ふう、おさまった」

回復力も上がっている。

妹紅が驚愕している。

並みの妖怪でも、彼女のヘッドバットには、当分のたうちまわるこ
とになる。

「なんつう奴だ」

「さて、真面目に話をしよう」

真面目な顔になるグラム。

「させるお!!」

彼女のヘッドバッドが直撃した。

今度こそ、グラムは数十分のたうち回った。

そして、約2時間後ようやく話が終了した。

本来なら一時間もかからず終了する話がなぜこんなにかかったのかは、お察しください。

「それにしても、妹紅さんありがとうございました!」

グラムが頭を下げる。

たまにこういう礼儀正しい部分があるせいで、少しペースを乱される。

「いいよ…たまたま気絶しているところを見つけて担いできただけだしね」

そう返す。

慧音が笑いながら言う。

「幻想郷のことは理解できたか?」

グラムは頷いて、親指を立てた手を慧音に向ける。そして、これまで無いほどの爽やかスマイルを見せる。

「常識に囚われちゃいけないんだな!？」

「まあ…今までの常識じゃやっていけないのは事実だ」

それに肯定した慧音。

そして、グラムは全てを理解した。

常識に囚われちゃいけない？

セクハラは全面的に許されるんだな!？

彼は興奮した。

「慧音!可愛い女の子探しに行く!！」

「待て貴様!！」

そんな言葉を聞かずに、グラムは慧音に借りた和服のまま外に出た。

走る彼の背中を見て、慧音の目が涙目になる。

「うっうっ」

珍しく弱気な慧音を見て、妹紅が苦笑した。

そして、慧音の肩を叩いて一言。

「私が行ってくるよ」

「うっうっ…頼んだ妹紅…うっ」

嗚咽と涙を我慢しながら、慧音は家へと入った。

妹紅は、首をコキコキと鳴らしてから走りだした。

もちろん。彼の処刑のためだ。

第二話「男なら黙って特攻あるのみ」(後書き)

あとがき

まったく、皆が感想をかくから張り切ってしまったよ！
ようし、今日の変態はここまでにしておこう！

あんたは偉い！

ま、次回は自重しませんがね！
それじゃあ、次回もよろしくお願いします!!

第三話「被害者続出！」

グラハムは、町中を走っている。
目当ては女。

それ以下は一切無く。それ以上も無い。

その瞬間、見つけたのだ。

彼の求める美少女。

年齢は一桁だろう。

しかし、彼にとっては問題は顔だ。

「少女おお！！」

走って、幼女の元へと向かう。

茶屋の前にある椅子に座る彼女の隣に座る。

足を組んで、背もたれに寄りかかり背もたれに腕をまわす。

「ふう」

わざとらしく息をついた。

そして、全身の力を抜く。

懐に手を伸ばす。

「こいつだ」

そこには、金だと思われる紙幣。
なぜか入っていた。

慧音の貯金か何かだろうか？

だが！入っていたのなら俺のもの！！
挿^いれても俺のものだけどな！！

彼はそれを手に、気色の悪い笑みをうかべた。

「三色団子を」

幼女がそう言った。

聞いた店のおばさんが頷く。

そして、グラハム。

「俺もお嬢ちゃんと同じもので」

そう言うと、幼女は驚いた顔でグラハムを見た。

グラハムは笑顔をみせた。

「こ、こんにちは」

少し引き気味に少女は一礼。

だが、幾多もこの空気を起こした彼にはなんの苦でも無い。

「俺はグラハム・松田、お嬢ちゃんは？」

「稗田阿求と申します」

阿求。

珍しい名前をしている。

そう思いながら、頷いた。

「じゃ、阿求ちゃん…ここは奢ってやるよ」

そう言くと、驚く阿求。

今会ったばかりの人間に言われれば誰でもそうだろう。

ちなみに、言うまでも無いだろうがグラハムは下心満載だ。ここで好感度を上げてあわよくば、と言うところだろう。

「安心しろよ…たまたまあった金だし、俺はすぐ向こうに帰るつもりだから…ほら、子供の内に大人の好意には甘えておけ」

そう言って、紙幣をひらひらと見せつける。

「で、ではありがとうございます」

「なに、気にするな」

そう言った瞬間。グラハムの横に誰かが座る。

「ずいぶん持ってるな…私にも奢ってくれんのかなあ？」

その声を聞いて、グラハムは阿求を見ていた顔を百八十度曲げる。そこには白髪の少女。

「妹紅さん…」

ホッと息をついて、笑う。

「もちろんですとも！」

親指を立てた手を妹紅に向ける。

「なんだよ…断るかと思った」

「いえいえ、妹紅さんのように美しい女性相手にそれはあり得ません」

その言葉を聞いた妹紅は顔をしかめた。
確実に引いている。

「素でそんな言葉が出てくるならお前は最悪だ」

「まさか、好感度アップ用の演技ですとも」

そして、少し沈黙。

なぜ今の言ったし、と彼は膝をついた。
落ち込んでいるのが見てわかる。

妹紅が、そんなグラハムを冷めた目で見てみると阿求が言う。

「妹紅さん…この方は？」

「外来人、ちなみに私がわかるのは変態ってことだけだ」

そう言うと、肩をすくめて呆れたようにため息を吐いた。
その話を聞いて、阿求はグラハムがとんでもない性格の人間なのかと固唾を飲んだ。

妹紅が、その顔を見て少し驚く。

「別に悪い奴じゃ無いんだけどな…変態ってだけでさ」

何度か頷く妹紅。

『悪い奴じゃ無い変態？』阿求は少し混乱した。

「だからって調子に乗んなよグラハ…」

O r z

こうなっていたはずの彼が消えていた。

視界を外した直後。

素早く音無く迅速にだ。

「アイツ…ナンパが失敗するからって逃げやがった！悪い阿求…また今度！！」

そう言って走って行く。

彼がどんな人間か少し興味をそそられた。

「あれ？」

彼が座っていた場所にお金が置かれていた。

飛ばないように小石まで乗せてある。

クスツと笑って、その紙幣を持つ。

「不思議な人」

こうして、彼はかの有名な稗田乙女と接触を果たした。

彼は村を出ることにした。

もちろん女目当てである。

それ以外の理由は一切合切無い。

「H A H A H A！マイフェイバリッツ幼女を再びい！！」

叫びながら、走る。

金髪赤眼の幼女のように、レベルの高い女の子を求めている。

「ははは！匂うぞ…少女の匂いだあ！！」

変態！

その姿、正に変態！！

最低最悪の男。

グラハム・松田。彼はひたすらに少女を探す。

だが、その行動を妨害すべく。

背後から誰かが走ってくる。

「まあああつううだあああつ！！」

妹紅だった。

燃えるように怒っている。

否！燃えてる！！

「こんな熱く迫られたのは初めてだぜ！」

クールに言いながらも全力疾走する。

涼しい男と熱い女。

否。

変態と美少女。

この2つが揃えば、残るものはただ一つだけ。

焼死体？

灰？

違う。

「もこたん!!」

妹紅に走り出すグラハム。

走って来るグラハムを見て、妹紅が反対を向く。
炎も消えている。

そう、残るは変態の愛フェチズムだけだ。

「もこたああん!!」

先程とは違う。

怒気もなければドキッも無い。

妹紅の恐怖と女への愛。

「よ、寄るなああ!!」

今まで向けられることの無かった感情を向けられた。
藤原妹紅を追うグラハム。
もちろん逃げるのは妹紅。

「捕まえたああ!!」

「きゃああ!!」

絹を裂くような妹紅の悲鳴。
変態は容赦無く彼女を押し倒した。

「ヒヤッハー!もこたんはいただきだぜっ!!」

「ちよっ!やめろお!!」

もう、グラハム・松田に言葉は通じない。
『常識』。
それを外した変態は、時に犯罪者になる。

さあ。

「ショータイムだ…脱がすぜ仔猫ちゃん?」

グラハムは、クールに笑みを作った。
まるで悪夢だ。

第三話「被害者続出！」（後書き）

あとがき

更新遅れてごめんなさい！

ゴールデンウィーク中にも更新すると思うので

ではまた次回！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6482s/>

東方融合伝～変態が幻想入り～

2011年5月19日05時07分発行